

てがみ 寺山 修司

一連

- 1 つきよのうみに
- 2 いちまいの
- 3 てがみをながして
- 4 やりました

二連

- 5 つきのひかりに
- 6 てらされて
- 7 てがみはあおく
- 8 なるでしょう

三連

- 9 ひとがさかなと
- 10 よぶものは
- 11 みんなだれかの
- 12 てがみです

1 詩型は？

- ・ 連構成の詩
- ・ 語 詩

2 表現技巧は？

- ・ 表現技巧が使われているところを探して、どんな表現技巧が使われ、どんな表現効果があるのか書きなさい。

3 構造（起承転結）を読み取る。

起 承 転 結

4 主題を読み取る。

『てがみ』の教材分析

1 『てがみ』の表現技巧と構造を読み取る。

	てがみ	寺山 修司
一連	1 つきよのうみに 2 いちまいの 3 てがみをながして 4 やりました	
二連	5 つきのひかりに 6 てらされて 7 てがみはあおく 8 なるでしょう	
三連	9 ひとがさかなと 10 よぶものは 11 みんなだれかの 12 てがみです	

- ・すべて平仮名↓平仮名のもつ優しいイメージ
- ・1行「つきよのうみに」
- ・「昼間」ではない↓人目につきたくない
- ・「川」ではない↓拾われることがない
- ・3・4行「ながしてやりました」―「ながしました」との比較わざと（意図をもって）流す、そうするのが良いとの判断
- ・「てがみ」が人であるかのように、優しく自由にする―擬人法
- ・5行「つきのひかりに」
- ・青白い光、不思議な力をもつ、異形の物に変化させる
- ・7・8行「てがみはあおくなる」
- ・「つきのひかりにてらされて」「あおくなる」変化する
- ・青白い光だから「あおく」は当然だが、何か「てがみ」でないものに変化するように感じられる。
- ・9〜12行「さかな」＝「だれかのてがみ」↓隠喩

2 構造

	てがみ	寺山 修司
一連	1 つきよのうみに 2 いちまいの 3 てがみをながして 4 やりました	起
二連	5 つきのひかりに 6 てらされて 7 てがみはあおく 8 なるでしょう	承
三連	9 ひとがさかなと 10 よぶものは 11 みんなだれかの 12 てがみです	結・転

- ・句点をつけると、「連」ごとになっている。
 - ・1行「つきよのうみに」と5行「つきのひかりに」の対応↓同じ場面・情景を詠んでいる。
 - ・3・4行「てがみをながしてやりました」の結果として、7・8行「てがみはあおくなる」
 - ・7行の「てがみ」は「うみにながされたてがみ」
- ※二連は、一連を承けている。

- ・一連・二連は、現実の世界の出来事を述べている。
- ・三連は、幻想的な、現実ではない世界を述べている。
- ・一連・二連が「情景」なのに対して、三連は「心情」（作者の気持ち・考え）を述べている。

※三連は、一連・二連から「変化」している。
三連は、作者の「言いたいこと」が述べられている。

※三連は一つの文なので、「転」と「結」に区別することは難しい。

○ 詩の「主題」は、「題名」と「転」・「結」から読み取れる。よって、「転」・「結」である三連が「主題」となる。「ひとがさかなとよぶもの」|| 「みんなだれかのがみ」という作者の考え・思いが「主題」であると考えられる。ここには「隠喩」が使われているので、その「たとえ」で何を言いたいのかを考える。

三連	9	ひとがさかなとよぶものは
	10	みんなだれかのがみ
	11	みんなだれかのがみ
	12	です

9行「さかな」は、一連1行「つきよのうみ」の「うみ」からの連想である。「うみ」にたくさんあるもの|| 「さかな」と連想した。
「ひと」に「さかな」と名づけられたものは、本質的に何なのかという作者の疑問がその背景に感じられる。

○ 「てがみ」は何を象徴しているのか。「てがみ」にたとえて述べようとしたものは何か。
「てがみ」が何なのか、具体的に書かれているのは、一連・二連である。

一連	1	つきよのうみに
	2	いちまいの
	3	てがみをながして
	4	やりました

「つきよのうみに」「ながしてや」るのであるから、この「てがみ」は、人目につきたくないものであり、流して消してしまいたいものと考えられる。しかも、「ながしてやりました」だから、「てがみ」を人であるかのように考え、その意志を尊重して「ながして」やったとも考えられる。そして、「いちまいのてがみ」なのだから、そんなに長くなく、思いが綿々と書かれたものともいえない。

・この「てがみ」は、誰の「てがみ」だと考えられるのか？
自分の「てがみ」だと考えると、それは相手に「伝えられない」「伝えられなかった」思いと考えられる。相手からの「てがみ」だと考えると、それは「叶えられなかった」自分の思いとすることができる。いずれにせよ、自分「伝えられなかった」「叶えられなかった」思いがこもった、しかも外に出すことのできない、閉じ込められた思いだと考えられる。
・その「てがみ」を「ながしてやりました」ということは、その思いを思い切ろうとする、自分の中でけりをつけようとする行為と考えられる。

○ 「てがみはあおくなる」とはどういうことか。

二連	5	つきのひかりに
	6	てらされて
	7	てがみはあおくなる
	8	でしよう

「つきのひかりにてらされて」「あおくなる」。青白い月の光に照らされて「あおく」なるのは当然だと考えられる。
しかし、「あおくなる」という変化を起こしたと考えると、狼男やドラキュラが月の光で変化したように、「つきのひかり」は普通のものを、異形のものに変化させる、不思議な力をもつものと考えられる。よって自分の思いがこもった「てがみ」は、「さかな」という「異形のもの」に変化すると考えられる。また、そうだとすると、現実の世界から幻想的な世界への変化の入口とも考えられる。

○ 主題は？

・「さかな」という、ごくありふれたものが、このようにも考えられる。つまり、そのもの（人によって名づけられたもの）が本質的に何なのかは、誰にもよく分からないのではないかと作者の考えがある。
・また、「さかな」|| 「てがみ」ということから、「さかな」はいろいろな人の思いからできているものであるとも言えるのではないか。そうした背景や裏側に隠れたものを、しっかりと見つめ、読み取らなければならないという作者の考えがある。

太陽 八木 重吉

- 1 太陽をひとつふところへいれていたい
- 2 てのひらへのせてみたり
- 3 ころがしてみたり
- 4 腹がたったらなげついたりしたい
- 5 まるくなつて
- 6 あかくなつて落ちてゆくのをみていたら
- 7 太陽がひとつほしくなった

1 詩型は？

・ 連構成の詩

・ 語 詩

2 表現技巧は？

・ 表現技巧が使われているところを探して、どんな表現技巧が使われ、どんな表現効果があるのか書きなさい。

3 構造（起承転結）を読み取る。

起 承 転 結

4 主題を読み取る。

『太陽』の教材分析

『太陽』の表現技巧と構造を読み取る。

1 表現技巧

	太陽	八木 重吉
1	太陽をひとつふところへいれていた	
2	てのひらへのせてみたり	
3	ころがしてみたり	
4	腹がたったらなげつけたりした	
5	まるくなつて	
6	あかくなつて落ちてゆくのをみていたら	
7	太陽がひとつほしくなつた	

・句点をつけると、1行、2～4行、5～7行となる。

・1行末の「たい」と4行末の「たい」が押韻になっている。

「たい」は希望の助動詞であり、7行末の「ほしくなつた」も作者の希望・願望と考えれば、句点のつけられるところに希望・願望を表す言葉が並んでいる。

・2・3・4行の「たり」から、

2行「てのひらにのせてみる」

3行「ころがしてみる」

4行「投げつける」が列挙法になっている。

・5行「まるくなつて」と6行「あかくなつて」が、並立、あるいは対比の関係になっている

・1行「太陽をひとつ」と7行「太陽がひとつ」が対応している。

2 構造

○句点をつけると1行、2・3・4行、5・6・7行の三つの部分となるので、それをもとに構造を考える。

○表現技巧の読み取りから考えると、

・1行末の「たい」と4行末の「たい」が押韻になっているので、1行を承けての2・3・4行と言える。

・1行「太陽をひとつ」と7行「太陽がひとつ」が対応している。

・また、1行「ふところにいれていたい」と7行「ほしくなつた」は、ともに「じぶんのものにしたい」という作者の願望を述べている。

○書かれている内容を考えて、以下のように分けられる。

・1行 作者の思い

2・3・4行 作者の思い

5・6行 情景・状況

7行 作者の思い

○よって、構造は「起は1、承は2・3・4、転は5・6、結は7」と考えられる。

ただし、句点をつけた分け方を生かし、「起は1、承は2・3・4、転・結が5・6・7」としてもよい。

3 『太陽』の主題を読み取る。

○詩の「主題」は、「題名」と「転」・「結」から読み取れる。よって、「題名」、「転」・「結」をそれぞれ読み取っていく。ただし、「転」・「結」は5・6・7行であるが、5・6行は情景・状況を述べているだけなのに対して、7行では作者の願望が述べられているので、7行から主に読み取る。

○「題名」の「太陽」から読み取れるイメージ

- ・ 大きい、丸い、中心 | 太陽系で最も大きな天体、恒星
- ・ 赤い、熱い、温かい（暖かい） | 温かくするもの、情熱的なもの
- ・ 生命を生み育てるもの、成長させるもの | 大切なもの、重要なもの、かけがえのないもの
- ・ 太陽神≡絶対神 | 力あるもの、神聖なもの、恐いもの

○7行「太陽がひとつほしくなった」から読み取れる主題

※なぜ太陽がほしくなったのか。理由が書かれているのは、5・6行

- ・ 「まるくなつて 赤くなつて落ちてゆくのをみていたら」 | 「落ちてゆく」のは、もちろん太陽。
- ・ 「太陽」が「落ちてゆく」というのは、「夕日（夕陽）」。
- ・ 「夕陽」は太陽が弱くなっていく、消えていこうとする、寂しくなる。
- ・ そういう「太陽」だから、「ほしくなった」と考えられる。

※「太陽」を手に入れてどうしたいのか。書かれているのは、1・2・3・4行。

- ・ 1行 | ふとここに置いていたい
 - ・ 「ふところ」とは、「着た着物と胸の間」なので、小さいもの、大切なものを入れておくイメージ。
 - ・ 2行 | てのひらにのせてみる
 - ・ 3行 | ころがしてみる
 - ・ 4行 | 腹がたったら投げつける
- いずれも、小さく軽いもの、かわいらしいもの、弄ぶことができるものというイメージで、「太陽」がもつ、大きい、偉大だというイメージと反対のイメージである。
- ・ 「太陽」のように大きく、偉大で、大切なものを、自由自在に、好き勝手に弄びたいという、作者の思いが感じられる。

○よって、主題は「沈んでゆく夕日を見ていると、大きく、偉大で、大切な太陽を、小さく軽い、かわいらしいものとして、自分のものになりたい、自由自在に弄んでみたい」という作者の思いということになる。

魚と空

木坂 涼

一連 1 急降下。

2 鳥が

3 翼で

4 海を打つ。

- 1 詩型は？
- ・ 連構成の詩
- ・ 語 詩

二連

5 鳥は

6 もう掴んでいる。

7 波は

8 海のやぶれ目を

9 ごまかしている。

- 2 表現技巧は？
- ・ 表現技巧が使われているところを探して、どんな表現技巧が使われ、どんな表現効果があるのか書きなさい。

三連

10 魚は

11 海を脱げでる。

12 初めて そして

13 たった一度だけ

四連

14 空の高見で

15 もうひとつの空へ

16 のまれる

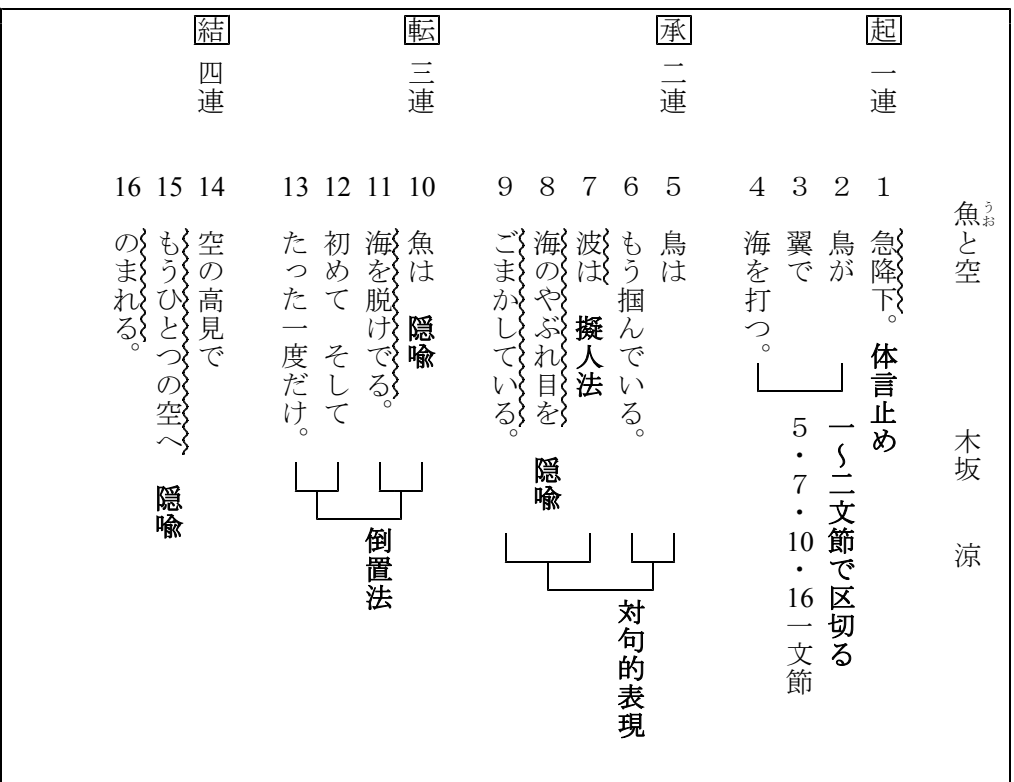
3 構造（起承転結）を読み取る。

起 承 転 結

4 主題を読み取る。

『魚と空』の教材分析

1 表現技巧



- ・ 題名「魚」を「さかな」ではなく、「うお」と読ませる。
- ・ 「句点」―場面や情景の流れを切り、リズムを生み出している。
- ・ 1行「急降下。」体言止め。
- ・ 2〜4行―一文を短く区切ることで緊迫した状況を表現。
- ・ 5・7・10・16行は、一行一文節。15行以外は、一行に文節。
- ・ 5・6行と7・8・9行は、対句的表現。
- ・ 7行「波は」9行「ごまかしている」は、擬人法。波によって、「海のやぶれ目」が曖昧になっていることを表す。
- ・ 8行「海のやぶれ目」は、隠喩。鳥と海が接触した部分のこと。
- ・ 11行「海を脱げでる」は隠喩。魚を捕らえた鳥が空に舞い上がった様子を、魚側から表現。
- ・ 10行「魚は」11行「海を脱げでる」と12行「初めて　そして」13行「たった一度だけ」が倒置法。
- ・ 15行「もうひとつの空へ」16行「のまれる」が隠喩。「もうひとつの空」は死後の世界を表し、「のまれる」は魚が鳥に食べられることを表す。

2 構造

○「四連構成」から、「起＝一連、承＝二連、転＝三連、結＝四連」と予想できる。

○書かれた内容から考えると、一連は鳥の様子について、二連は鳥と波の様子、三連は魚、四連も魚なので、三連から「魚」の様子に変化していると考えられる。

・ 一連の「鳥が翼で海を打つ」から、二連の「鳥はもう掴んでいる」と、一連を承けて二連が展開していると言える。

・ 一連は海面、二連も海面、三連の「海を脱げでる」は「空」のことを言っているので、変化している。四連も「空の高見」で起きた出来事を言い、「もうひとつの空」という新たな「空」（死後の世界）をも述べている。

○三連の「海を脱げでる」とは、「魚」にとつて、住み慣れた海を離れるという変化とも読める。

○三連を見ると、「倒置法」で強調されている。また、「初めて」「たった」「一度」「だけ」と、「生涯一度だけの、初めての出来事」を強調し、連体詞「たった」、副助詞「だけ」とこれも限定的に強調している。

○四連の「もうひとつの空へのまれる」は、魚が鳥に食べられたことであり、一連からの「鳥に捕らえられ、食べられた魚」のまとめとなっていると言える。

○「題名」も「魚と空」であり、それが書かれているのは、三連・四連である。

○よって、以上のことから、「起＝一連、承＝二連、転＝三連、結＝四連」と言える。

3 『魚と空』の主題を読み取る。

○詩の「主題」は、「題名」と「転」・「結」から読み取れる。「題名」も「魚と空」であり、それが書かれているのは、「転」・「結」と読み取れる三連・四連である。

- ・一連の「鳥が 翼で 海を打つ」ということは、鳥が魚を捕らえるために、海に向かって急降下し、海面を翼がたたいたことを言う。
- 二連の「鳥は もう掴んでいる」とは、海の中にいる魚を、鳥が捕らえたことを表す。
- 三連の「魚は 海を脱けでる」とは、鳥が魚を掴んで空に舞い上がったことを表す。
- 四連の「空の高見で もうひとつの空へ のまれる」とは、空の高いところで、魚が鳥に食べられたということを表している。
- ・つまり、「鳥が魚を捕らえ、食べた」という、当たり前が出来事を、「魚は 海を脱けでる」「空の高見で もうひとつの空へ のまれる」と、詩的に、文学的に表現した詩であると言える。

○よって、「鳥に捕らえられた魚」「鳥に食べられた魚」というありふれた出来事も、別の見方をすると、「初めて海を脱けでて、空の高みでもうひとつの別の世界にのまれていった」とも言える。このように、ありふれた出来事も、別の見方から見たり、独特のとらえ方をしたりすることができる。